

定仙の浄土思想について

服部 淳 一

中国仏教において浄土思想は、華嚴浄土思想、禪淨融合思想と云うように他思想と影響を持って展開し、浄土宗においては法然以降、大乘仏教的基礎や他宗教との対応の努力によって宗義の充実を計ってきた。この両面から見ても浄土思想は大きな基盤をもっていることが窺われる。この点から江戸期における華嚴浄土思想、特に定仙の浄土思想に焦点をあて、主として『華嚴通貫』を中心として浄土宗系の引用論疏を検討し、定仙の浄土思想の受容の特色を見、江戸浄土教の特色を考察したい。

表題の定仙は江戸末期の華嚴宗の僧であり『華嚴通貫』と『海蔵念仏典決』を残している。定仙の伝歴は明確ではないが、『華嚴通貫』が撰せられた時に七十六歳と云っているので明和七年（一七七〇）の生まれであることは解る。巻末に南勢別山定仙とあるので、時代的に見て普寂あるいは尾張八事山との関係が予想される。

定仙の思想はこの著書を通してしか知ることが出来ない

が、この時期は浄土宗義も檀林教育によって一定のレベルを保つことができたわけであり、他宗派における浄土宗義の受容を知ることにより、当時の浄土宗学の内容をかいま見ることが出来ると思う。

この『華嚴通貫』は弘化二年（一八四五）十月に著わされたもので、

宋復庵作、華嚴論貫、貫徹一經、大旨。往往歸於禪悟。今以本經要文、通淨土之関。復彼直示、円極之理。此略明事理、双行。雖似效響。其門不同。名為華嚴通貫也。余今年七十六。一死亦在。近矣。因以日用所誦持、華嚴略抄二本。付与二三子。且述斯書。預擬遺訓。

と、その冒頭に示されるように、宋の復庵が『華嚴論貫』を著わし華嚴經の主旨は禪の悟りにすることにありと説いた形式に習い、内容は全く別であるが定仙は華嚴經の教えは浄土教を貫通するものであると、華嚴思想によって浄土教義を解釈したものである。「遺訓」とあるように、七十六歳の時、

日常用いている『華嚴略抄』（或は要略華嚴經）と共に弟子に贈ったと示されている。

華嚴經における浄土思想は、諸先生の御研究によって、六十華嚴の寿命品、八十華嚴の寿命品では最劣の浄土であった西方極樂が、異訳の成立や浄土思想の盛行などによって華嚴の中で増幅していったものと考えられ、智儼、澄観、宗密などにより、西方浄土は蓮華嚴世界への入口、初地所見とする浄土初門説、また華嚴一乗説によって、西方極樂と蓮華嚴世界が即一であるとする華嚴極樂同体説が生まれ、普遍していったのである。定仙の考え方もこの線上にあるのである。

定仙は、以三取相分別之識種、感三六趣生死之業影、由三正智離念之勝因、証三四德常住之恒果。是以一切諸仏説法利生。以三無分別無礙行。即能入三法界海會也。

とあるのが定仙の基本的な見方であり、無分別無礙行による法界への帰入の方法として念仏行を位置付け、

若夫宿植德本人。有レ時妄想輕安。心光發現。自然識得十方三世諸仏衆生本來安住。金剛道場華藏海會。亦即了知。八万四千法門盡是歸入。法界一行念三昧也。

と云うように、華嚴界への帰入するための念仏三昧ととらえている。

浄土宗における華嚴思想の位置付けとしては、法然が『選択集』第一章段で、法華經、隨求陀羅尼經、仏頂尊勝陀羅尼

などとともに華嚴經を傍明浄土經典としてあげ、また『傍説浄土教論集』に華嚴經典として九經をあげており、浄土宗義と深い関係にあることを示しているが、『選択集』第十六章段では華嚴宗の諸師が示すところの浄土に関しての説は、専修ではなく、あくまでも聖道の中に説く浄土であるとして否定している。しかしながら三祖良忠は『往生論註記』第五に「極樂は即ち華嚴界他受用なり」と示し、華嚴即極樂の見解をもっており、更には西晉聖聡が『一枚記請見聞』において「華嚴禪門の悟入も解説を遂ぐるの日は、自然に法王の家に至るべし。仏土に至る者、必ず仏心を念ずる故に二門皆念仏なり」と示している。このように浄土宗義の解釈のうえで華嚴思想が密着してきたことは明らかである。

定仙は『華嚴通貫』において念仏三昧が華嚴經から発生したことを主張するのであるが

此華嚴經者。十身毘盧遮那。安住華嚴法界海會。以三一切諸仏同一性。十華嚴藏世界海。微塵數大人相。所三演説之根本法論。八万四千諸波羅蜜。淨仏国土成就衆衆生。無レ始無レ終。常證不變。乃至衆生説。国土説。三世如是説。取三要言之。廻然超三出文字言竟情識之表。人人具足。現今円成。一念法界之全体是也。

とし、すべての教えは華嚴の理に基ざっていることを表明し、またこの理に従って数多くの念仏三昧や行願品の回向が説かれ、浄土の法門が現われてくるとしている。

この基本をもととして、定仙の浄土思想の受容の特色を見てみたい。浄土宗関係の引用論疏を見ると、法然の『選択集』『一枚起請文』、善導の『観経疏』『般舟讃』、聖光の『徹選択集』『識知浄土論』、聖罔の『教相十八通』、観徹の『円頓戒誘蒙』を引用し、解釈されている。

定仙の浄土宗義の理解は、

如^ハ三^カ選択集。則^チ当^ニ吾^カ邦^ノ宗教^ヲ多^ク途^ニ之^ノ時^ニ。大^ニ信^ニ究^ニ竟^ニ一^ノ乘^ヲ果^ニ号^ス。不^レ私^ニ不^レ溢^ス。疾^ニ乘^ニ仏^ノ願^ヲ。暗^ニ契^ニ仏^ノ心^ヲ。單^ニ提^ニ直^ニ入^ス。不^レ敢^ニ涉^ニ理^ヲ解^ス。三^ノ根^ヲ易^ニ行^ス。五^ノ乘^ヲ齊^ニ修^ス。是^レ故^ニ持^ニ名^ヲ弘^ニ通^ス。如^ニ百^ノ川^ノ之^ノ就^ニ下^ス。洋^ニ洋^ニ流^ニ。頗^ニ海^ニ也^ニ。

と云っているように、『選択集』の説を重要視し、念仏の助業に注目して、

夫^レ空^ニ祖^ノ選^ニ集^ヲ。專^ニ雜^ノ之^ヲ廢^ス立^ス。頗^ニ嚴^ニ於^ニ善^ノ導^ノ。而^レ其^ノ寬^ニ容^ニ亦^ニ及^ニ于^ニ此^ノ一^ノ焉^ニ。嗚^ニ呼^ニ增^ニ仰^ス。烈^ニ祖^ノ立^ニ宗^ノ之^ノ悲^ヲ願^ヲ。恢^ニ廓^ニ吾^ノ輩^ノ固^ニ我^ノ之^ノ偏^ヲ見^ヲ。然^レ則^チ解^ニ者^ノ結^ニ緣^ヲ于^ニ究^ニ竟^ニ一^ノ乘^ノ果^ヲ海^ヲ法^ヲ門^ヲ。行^ニ者^ノ修^ニ習^ニ於^ニ性^ノ相^ヲ一^ニ如^ニ念^ニ仏^ノ三^ノ昧^ヲ。

のように、解を助業として華嚴一乘を、行を正業として念仏三昧を修する形をとっている、本来の専修とは違っている。

善導の『観経疏』は実践の事理双修を主張する論拠として、

又^ニ按^ニ善^ノ導^ノ觀^ニ無^ニ量^ノ壽^ノ經^ヲ疏^ヲ。積^ニ第^ニ八^ノ像^ノ想^ノ觀^ヲ中^ニ。斥^ニ唯^ノ識^ノ法^ノ身^ヲ。自^ニ性^ノ清^ニ淨^ノ仏^ノ性^ノ等^ヲ觀^ニ云^ス。經^ニ文^ニ既^ニ言^ニ想^ニ像^ヲ。仮^ニ立^ニ三^ノ十二^ノ相^ヲ。乃^チ至^ニ此^ノ觀^ニ。

定仙の浄土思想について（服部）

門等。唯^レ指^ニ方^ノ立^ニ相^ヲ。住^ニ心^ヲ而^レ取^ニ境^ヲ。總^ニ不^ニ明^ニ無^ニ相^ノ離^ニ念^ヲ也^ニ。と用い、

所謂^ニ帶^ニ事^ノ行^ヲ。無^ニ觀^ノ有^ニ觀^ヲ。無^ニ念^ノ有^ニ念^ヲ。事^ニ理^ノ双^ニ修^ス。定^ニ慧^ノ不^ニ二^ノ。非^ニ單^ノ法^ノ身^ノ單^ニ無^ニ生^ノ觀^ヲ也^ニ。

とし、また、

善^ノ導^ノ既^ニ積^ニ前^ノ觀^ヲ云^ス。凝^ニ心^ヲ不^レ絶^ス。即^チ是^ニ見^ニ淨^ノ土^ノ之^ノ相^ヲ。此^ニ名^ヲ想^ニ中^ニ見^ス。

とし、

至^ニ真^ノ身^ノ觀^ヲ。不^レ可^ニ以^ニ形^ノ相^ノ思^ニ惟^ニ念^ヲ。唯^ニ此^ノ不^レ觀^ニ相^ノ貌^ヲ。專^ニ稱^ニ名^ノ字^ヲ。隨^ニ順^ニ仏^ノ願^ヲ。相^ニ應^ニ念^ノ心^ヲ。不^レ飯^ニ作^ニ意^ヲ。以^ニ無^ニ觀^ノ之^ノ觀^ヲ。拆^ニ如^ニ空^ノ相^ノ海^ヲ。太^ニ權^ニ密^ニ意^ヲ。不^レ得^ニ而^レ可^ニ測^ス也^ニ。

と真身観釈を解釈し、更には真身観の内容は「華嚴十蓮微塵数の相海と全く同じ」と示している。更に

善^ノ導^ノ自^ニ積^ニ法^ノ界^ヲ有^ニ三^ノ義^ヲ。一^ニ者^ノ心^ノ偏^ヲ故^ニ。二^ニ者^ノ身^ノ偏^ヲ故^ニ。三^ニ者^ノ無^ニ障^ノ礙^ノ故^ニ。此^ニ無^ニ障^ノ礙^ノ法^ノ界^ヲ。與^ニ華^ノ嚴^ノ事^ノ々^ノ無^ニ礙^ノ法^ノ界^ヲ同^ニ。

として華嚴極樂自体論を展開している。香月乗光氏は、「華嚴經壽命品の弥陀浄土説とその展開」の中で、定仙に触れ、定仙が『海蔵念仏典決』のなかで提起した浄土初門説と華嚴一乘義による華蔵極樂自体論の問題に、浄土宗側からの対応があったならば、弥陀仏土論はより深く研究がなされたのではないかと述べられている。この華嚴極樂自体論は、

但^ニ以^ニ衆^ノ生^ノ乱^ニ想^ヲ無^ニ由^ノ寄^ニ託^ス。標^ニ心^ヲ西^ノ方^ヲ。簡^ニ余^ノ九^ノ域^ヲ。今^ニ以^ニ弥^ノ陀^ノ。

為^レ法門主。則十方三世一切仏刹。盡為^レ弥陀身土。乃至心仏衆生。一切趣^レ一。一趣ニ一切。事々無礙法界。主伴具足。

とあるように、阿弥陀仏を法門の主とするところから始めて、十方の諸仏、諸仏国土は弥陀の中に統攝されるので、すべてが即一となると説き、劣土であつた弥陀浄土が華嚴蔵世界と団体となると云うのである。

このように浄土思想を受容し、善導の論を用いるにあつて、鎮西聖光と了誉聖問の教義が大きな地位を占めていゝるうに思ふ。

聖光については、

夫国師者。空祖大師。正宗得髓嫡伝。親蒙証明。其言曰。源空全身。即是聖光。吾與聖光。一體無二。（中略）至二祖国師。法運應時。広融性相。益彰真風。於是淨教周備。赫然猶如杲日升天。宗教施設。一張一弛。豈易測哉。爾來龍象迭興承鎮西。大振斯道。

と、浄土宗における位置を明らかにし、その著『徹選択集』に示されている、

文云至極甚深之大乗者。名即體也。相即性也。是故名體不二。性相少如。然則此念仏三昧。一切諸仏之體性也。此是大乘至極之法門也。又夫欲知念仏往生。先須知一切菩薩。淨仏国土。成就衆生之義也。乃至單聖道門人。單浄土門人。不可知^レ之。聖道浄土兼学之人。可^レ知^レ之。此則聖教之源底也。法門之奥義

也。仏菩薩之秘術也。此書上。不可載盡。委可聞口伝也。又称名念仏。不^レ論機根之淺深。自然正智正解。相応心。契同浄仏国土。成就衆生之行。

を、取意してあげ、『大智度論』による「浄土国土、成就衆生」と、「聖道浄土兼学」の説を浄土宗義の重要点としてとらえている。「浄仏国土、成就衆生」は、定仙も、

此華嚴經大要。諦信文殊無相妙慧。了達心性本無所有。發起普賢如幻行願。浄仏国土。成就衆生。兼此二而。不^レ有所住。是為三聖一体之仏。

の示しており、この思想は大乗仏教を通じてのものであり、聖光も浄土宗義を仏教全体の中で位置付ける為に用いたもので、また「聖道浄土兼学」の説も「自宗妙宗にくらければ他を度するに由なし」からくるもので定仙は、

又国師徹選択中。挙八種選択。更加三十二種選択。宗教廃止益敵。而又汎融浄土。

と聖光教学を見ているように、聖光は応用としての宗学に注目しており、先述のように華嚴を取り入れた論述が浄土宗の中に見られることから解るように、華嚴思想と合致するもの当然である。

聖問については、『華嚴通貫』に、

浄宗有二門。謂教門実義門。約教門。則以法界為衆生。以身属仏。今依実義門。此二門尅而言之。亦互相具。善導既言

法界即是如來國。豈但滯二一門哉。

とある教門実義門の二門は、浄土宗において聖岡によって導入されたものであり、また善導の『観経疏』を釈するところでも、

此レ唯約ニ教門。若約ニ実義。諸師亦通。

として使用し、

教門有別。帰元無二。凡円極一乘。華嚴法華。及余大乘經典。靡不盡明。事理無礙。体用不二。

として、定仙は自説への帰還をする時に、この二門を用いている。

又、

了普問公云。幸哉我等。依大師自解仏願。恩力不観仏身。正見仏心。乃至観仏行人。仏影現行者心中。念仏衆生。辱居在仏心内。当知影現有時。居在無間。

と、『教相十八通』からの取意を引用しているが、この部分は、阿弥陀仏の本願力を表わしたところであり、定仙はそのあとに、

如上祖訓。為鎮西正宗伝灯仏子者。不可不知也。

と、聖岡の教学を支持している。

云うまでもなく聖岡は阿弥陀仏の本願力の絶対性を強調することに主眼を置いて、その教学を形成したのであって、定仙の説とはその基を異とするのであるが、定仙にとって聖岡

の随他扶宗の自説主張に適応したものと思われる。以上のように、聖光、聖岡の説をもって善導の教えを解釈することによって、浄土思想を華嚴学的な分野へ導入することができたと考えられる。

しかし最終的には、

雖已安住。弥陀海会。一水西見。智隔報殊。猶如生盲不見天日。宜当脱去鈴罽之窮途。通達華藏之郷関也。

と西方極楽から蓮華藏世界にもむくことを第一目標と現わしている。

定仙の引用形態について特色が見られるが、例えば「善導云く」として、

西方寂靜無為楽。畢竟逍遙離有無。大悲薰心遊法界。分身利物等無殊。一到弥陀安養國。畢竟逍遙即涅槃。涅槃莊嚴處。滿見色聞香罪障除。百宝莊嚴隨念現。長劫供養報慈恩。微塵故業隨智滅。不覺転入真如門。普願有縁同行者。專心直入不須疑。一到弥陀安養國。元來是我法王家。一日七日專称仏。命斷須臾生安樂。一入弥陀涅槃國。即得不退證無生。門門不同八万四。為滅無明果業因。利劍即是弥陀号。一声称念罪皆除。同学相隨遊法界。法界即是如來國。一一仏國恒沙会。分身聽法修供養。得蒙諸仏慈光照。摩頂授記入無余意樂。他方住即住。須欲歸還即歸還。本国他方亦無二。悉是涅槃平等法。諸仏智慧亦同然。到處盡是法王家。

と引用されているが、初めの「西方寂靜」から「等無殊」までが『観経疏』の水想觀の文であり、以降は『般舟讃』の文である。この『般舟讃』の文については、「一到弥陀」から「罪障除」まで、「百宝莊嚴」から「法王家」まで、「一日七日」から「証無生」まで、「門門不同」から「罪皆除」まで、「同学相随」から「即帰還」まで、「本国他方」から「平等法」まで、「諸仏智慧」から「是法王家」までの七句を組み替えて引用している。『識知浄土論』も大幅な取意が行なわれ、「徹選択集」も組み替えと取意によって引用されている。この引用作業は定仙自身に依るものだと思われ、そこに解釈の特色が見られる。

江戸後期の成誉大玄は『浄土頌義探玄抄』に、

問若撰^シ円教^ニ有^ハ何過失^ニ答此有^ニ五失^ハ（中略）三華天奴隷^{ナル}故^ニ者中古以来我門之徒欲^シ立^テ円教^ニ以^テ撰^ル浄宗然^ル鸞綽導^ニ無^ニ円教^ニ密詆^テ天台兩祖余誕^シ設^テ多劬勞^ニ成^テ立^テ円教^ニ謂^フ得^ル龍蛇珠^ヲ斯但有^テ勞而無^テ功何^ノ者縱^シ說^テ得^ル円旨^ヲ究^メ其廣大^ニ盡^メ其精微^ニ如^シ判溪四明^ニ不^レ免^ニ天台閣下奴隷^ニ傳^フ臭千載^ニ有^ニ何面皮^ニ此無^ニ他由^ニ不^レ說^テ鸞綽導空章疏^ニ故也學者心知我宗非^ニ是華嚴^ニ亦非^ニ天台何故我宗法門強^シ屬^シ円教^ニ欲^ス為^ル彼僮僕^ニ耶甚^ニ笑^フ人之好^ミ怪也非^ニ愚則狂^{ナリ}

と当時の浄土守の状態を、天台、華嚴など他宗義によって解釈をすることが多いので嘆かわしいと云っている。ここに随

他扶宗、随自顯宗兩門のギャップと云うものが多く出てきていると考えられる。この定仙による浄土教の解釈も、逆の立場で同様のことが云えると思う。

以上のように、定仙の浄土教受容形態を見ると、基本的に善導、法然の教学を受け、その展開として鎮西聖光、了蒼聖問の教学によって論じていることが解る。定仙の思想の根底にあるものは、蓮華藏世界への行き易さであり、文殊無相の妙慧を諦信出来ず、万法唯心を了達出来ない人々に注目したものと考えられる。愚痴無知の凡夫を救いの中心とする善導、法然の浄土思想の機根の考え方によって、華藏極楽団体説へと導いていったと思われる。このような動きは、江戸期における浄土宗義が広がりを持ち、他思想との連係を深めていったことを示すものである。

- 1 続浄十五卷二八九頁 2 続浄十五卷二八八頁 3 続浄十五卷二九九頁 4 続浄十五卷二九九頁 5 続浄十五卷二九八頁 6 続浄十五卷二九九頁 7 続浄十五卷二九二頁 8 続浄十五卷二九二頁 9 続浄十五卷二九二頁 10 続浄十五卷二九三頁 11 続浄十五卷二九一頁 12 『法然浄土教の思想と歴史』三八六頁〜三八七頁 13 続浄十五卷二九一頁 14 続浄十五卷二九四頁 15 続浄十五卷二九四頁 16 続浄十五卷二八九頁 17 続浄十五卷二九四頁 18 続浄十五卷二九一頁 19 続浄十五卷二九二頁 20 続浄十五卷二九二頁 21 続浄十五卷二九四頁 22 続浄十五卷二九四頁 23 続浄十五卷二九一頁 24 続浄十五卷二九一頁 25 浄全十二卷五八七頁

△キーワード▽

定仙、華嚴浄土教、『華嚴通関』

（大正大学総合仏教研究所研究員）